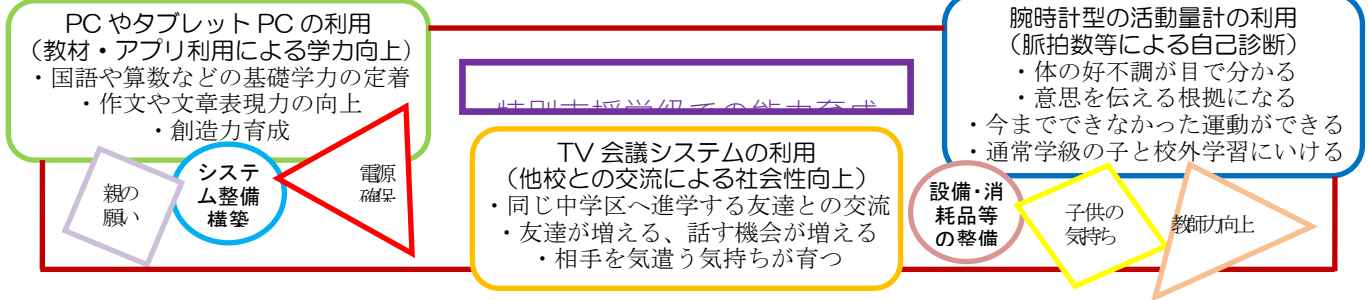


第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 62

学校名・団体名	岡崎市立愛宕小学校特別支援教育研究会
HPアドレス	http://cms.oklab.ed.jp/el/atago
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	ICTによる特別支援学級での能力育成
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>特別支援学級に所属する児童が年々増えている。しかし特別支援学級の免許を所有している教諭は少なく、該当児童の能力開発に、指導教師は不安をもちながら指導をしている。情緒障害や病弱のある児童は、合併症も有る。運動に配慮が必要なことはもとより、校外学習などの活動では、体調不調になっても、その意思を教師に伝えることができない。</p> <p>しかし児童・保護者ともに、教師も一般の児童と同様に、校外学習などの体験活動には参加したいと考えている。教師が、特別支援の児童の指導が不慣れであっても、そういった能力開発や校外学習などを可能にする手立てとして、PCやタブレットPCを利用して、教材アプリや活動量計等が利用できると考え、以下の実践を行った。</p> <ol style="list-style-type: none">1 PCやタブレットPCで使える教材・アプリケーションの利用2 TV会議を利用した他校との交流3 活動量計により体調の状況把握をしながらの運動や校外学習の実施	

活動・実施テーマ IGTによる特別支援学級での能力育成



1 PC やタブレット PC を利用した個別の能力開発

PC やタブレット PC で能力開発アプリを利用した学習を行うことで、児童の学力、思考力、創造力などを伸ばす。本校児童は、言語・表現活動、平面や空間での図形認識とその処理、同時に複数のことを行う並行処理などを苦手なことから、これらを育成するための教材・学習アプリの利用を行った。また、次期学習指導要領で必須となるプログラミング学習は、同様に並行処理能力を伸ばすと期待されていることから取り入れた。

成果として、今まで座っていられなかった児童が、席について学習する時間が増えたこと、勉強は10分程度で、飽きてしまっていた児童が学習課題に向け、長時間取り組めたこと、不登校傾向であった児童が、登校の意思を示すようになったことなどがあげられる。



算数の思考育成アプリ利用 PCでの教材アプリ利用 OSMO社の教材利用 プログラミング教材利用

2 TV 会議システムを利用した学校間交流

本校の特別支援学級は1学級当たり2～3人のため、大人数の場所に出る経験が極端に少なく、他校の友達と出会う機会も少ない。「内向的・おとなしい・話ができない・学校を休みがち」などの気質を変え、社会性を高めるとともに、中学校進級後も円滑な学校生活を送ることができると考えた。学校間移動が難しいのでTV会議システムの利用は効果があると考えた。お互いの顔を見ながらの交流学習をすることで、他の学校の児童に慣れ、仲良く会話も進み、言語・表現活動や相手を気遣う心の育成が進むと考えた。2ヶ月に1回程度の割合で、隣の小学校の特別支援学級と交流をした。内容は、自己紹介 じゃんけん あっち向いてホイ 体操等である。



成果として、普段は、もごもごしゃべったり、はっきりしない言い方をしたりする子供が、USBカメラとマイクに向かって、はっきり話すことができた。相手が聞きやすい・見やすいように、位置を変えるなど、気遣うことができるようになった。(左写真は相手校と一緒に体操、右写真は自己紹介の様子)

3 活動量計で体調管理をする校外学習

体調不順から運動や校外学習に制限が生じやすく、好不調の意思を大人に伝えることがうまくできない。腕時計型活動量計は、脈拍数や歩数の計測ができ、脈拍数の増減がLEDでわかる。専用アプリをタブレットPCで利用すれば、一日の活動量や歩数、脈拍数の変化などがわかる。これによる体調把握で、調子の悪くなる前に休憩する等の対処が可能になり、運動や校外学習で役立てることができると考えた。



活動量計アプリ画面 運動後の活動量計のLED ランニング中 校外学習中の利用1 校外学習中の利用2

4 研究の成果

特別支援学級の児童が通常学級の児童と同様な活動を、多く実施することができた。集中力のない児童でも、タブレットPCを使った学習では、授業時間半分を席に座ることができた。心肺機能の低い児童が、マラソン大会に参加したり、同学年の全ての校外学習に参加したりすることができた。特に保護者は児童の変容に感動していた。PCによる思考の可視可と活動量計による身体状況の可視可により、安心できる教育が実現できた。